

「田中 岑 作「三人の構図」修復と調査」

はじめに

2014年9月に川崎市市民ミュージアムにて「いろいろ、そうそうー田中岑」展が開催された。弊社ではその展覧会に先立った作品の修復を担当させていただき、同時に戦時下に描かれた作品の調査と修復をさせていただく機会を得て今回の発表に至った。

田中岑は、大正時代に生まれ第1回安井賞の受賞者としても知られ昭和?平成と活動した画家である。香川県の豊浜町に生まれ、小林万吾主催の同舟舎で学び、東京美術学校へと進む。そして日本大学芸術学科へ転入し入学時から卒業間際の昭和16年までかけて描かれた「三人の構図」は、立つ、座る、横たわる人物像を描いたもので卒業生制作のエスキースとして描かれ、田中自身が終生手元に保管してきた作品であり、晩年に制作する戦争で亡くした友の顔を表した「さざれ石」(右下図版参照)とともに、入隊する画学生仲間を強く意識した、生と死を思想した作品だ。さらに昭和41年に映画監督コーネル・ワイルドの依頼により、映画『ビーチレット戦記』のタイトルバックに使用する作品を依頼され、戦争を象徴的に描いた作品を制作した。実際の映像には、監督と協議後に制作した作品が使用されたが、創作活動の中で戦争と向き合った田中は、当初制作した作品を後に改題し、ヴェトナム戦争と対峙した作品として新たな作品も発表していった。田中岑は、戦時下、そして戦後も創作活動の中で戦争と向き合い、折に触れ各時代での「戦争画」を描き綴った画家ある。

本論では戦時下、大学卒業間際に描かれた作品「三人の構図」の光学調査による状態や技法の観察、そして修復をおこなった報告に加え、「プロパガンダ」や「記録」とは異なる、戦争体験とともに「戦争」を生涯にわたって向き合い、表現した画家の作品を考察するものである。

1. 田中 岑と「三人の構図」

田中は、東京美術学校入学後、当時、日本大学芸術学科で講師を務めていた海老原喜之助の勧めもあり日本大学へ転入し、昭和17年秋に徴兵され繰り上げ卒業する。その後旧軍に入営し第3中隊に配属、昭和19年、第二中隊より満州へと赴く。田中は、「アトリエから、昨日一人、今日また一人と抜けて行く、その中で私はこの絵を描いた。「いずれ私も」のおののきの中でのさめが、このさめた構図を構想させたのか」と語り、そして、それから60年ほど後の2003年に描いた、3つの石を並列して表現した作品「さざれ石」も亡き戦友に想いを寄せた「三人の構図」であると語ったという。

2. 「三人の構図」作品の組成と状態

作品の寸法は、49.8×60.0cm、キャンバスに油彩画で描かれた作品である。作品の裏面、木枠の中棧には、昭和十四年十一月?三月 三人の構図 田中岑と書かれている。一見して厚塗りの絵具で描かれた作品は、横たわる人物の左腕や、座る人物などを観察すると絵具層の下層には、以前に別の構図で表現した筆致や絵肌が見られる。いわゆる古いキャンバスを使用して表現した作品に「三人の構図」が描かれたと見られる。数層に渡って塗り重ねられ、著しく厚い絵具層が形成されたと見られ、すでに亀裂の入った箇所には描画した跡も確認できる。その後、下辺は切り離され、ワックスを接着剤として、麻布が継ぎ足された後があり、周辺の欠損した絵具を白色の絵具によって補填していることがわかる。その周辺には作者か、または別の人物によって加筆された跡が見られる。また画面に著しく亀裂の発生している背景から、近年に広い範囲にわたって

加筆のような塗りつぶしが確認できる。さらに座る人物と立ち上がる人物には、亀裂の上にもパステルのような色材で加筆された跡が見られる。

3. 光学調査と観察による技法、状態の所見

側光線写真を観察すると、絵具の塗り重ねや著しい厚塗りの程度を確認することができる。また紫外線の蛍光観察では、背景に広い範囲で加筆、また下辺に補彩されていることがわかる。さらにエックス線の観察では、縦構図に女性が描かれているような図像が現れた。半身像の手前には花瓶の置かれたテーブルのような形態も構図されている。また下層の筆致は「三人の構図」の中央の人物をやや小ぶりに描きなおしているようにも見える。

4. 作品の修復

当該作品は支持体の酸化や脆化が著しく、また後年の加筆や修理の著しい状態であることから、今回の修復処置は、カンバス縁部分の支持体の補強に加え、絵具層では作者による加筆か、修理者による処置なのかが不特定な箇所もあることから汚れた画面を洗浄し、浮き上がりや剥落に対する処置をおこない、明らかに欠損した箇所以外はそのまま（剥落止めのみおこない、色は入れない）にするという現状を重視した方針で修復をおこなった。

5. まとめ

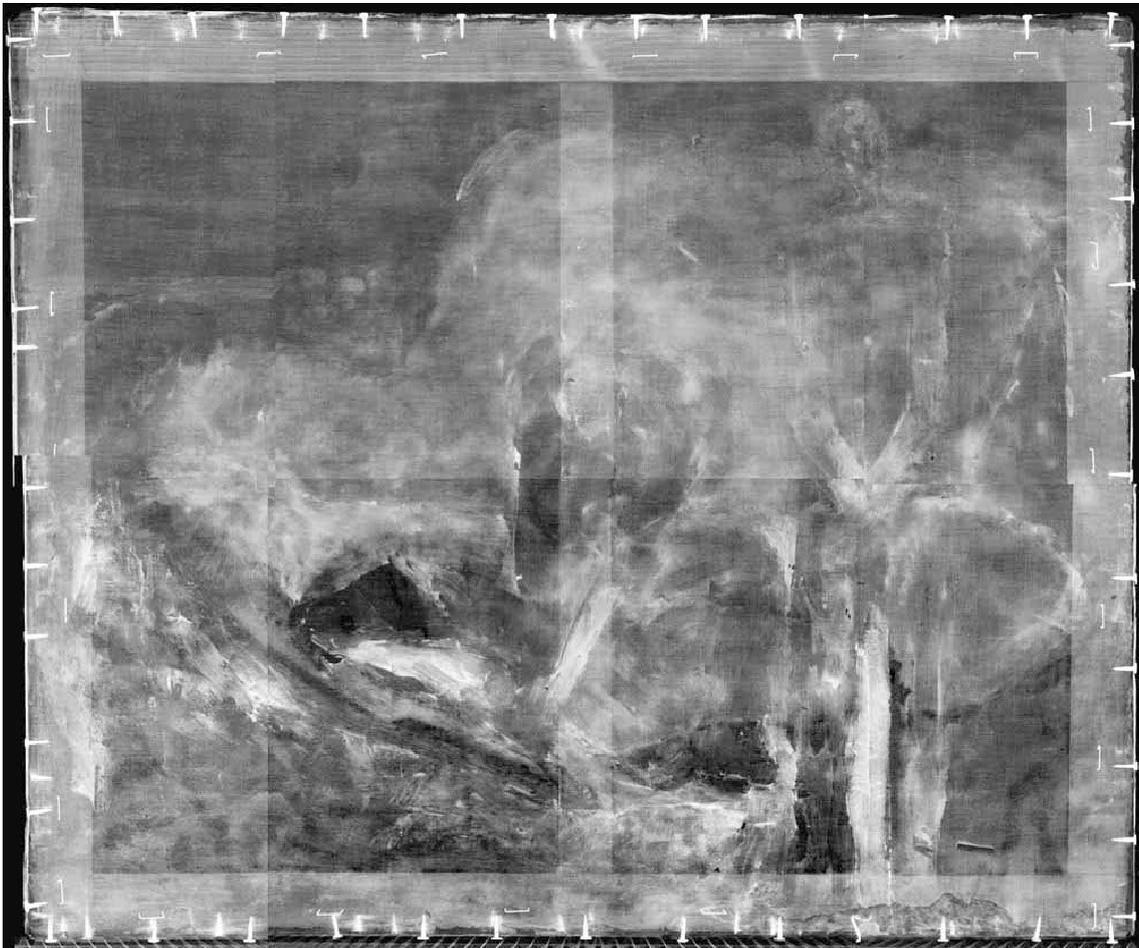
「三人の構図」の中には様々な歴史が刻まれている。田中岑の50年代前期、若年時代の作品には丸、三角、四角といったシンプルな色面による抽象的な作例が登場する。この古いキャンバスに描かれた「三人の構図」にも立像、坐像、横臥像が描写されるが、それぞれにはっきりとした筆致で四角いトルソ、丸い頭部、そして三角の形態がトルソに描かれていることが興味深い。人物を「描写」しながらもキュビズムのような単純な形態に置き換えようと試みた「抽象性」が現れている。エックス線の観察では、縦構図の女性像と見られる画像が下層から浮かぶ。この下層の人物は、田中の作品であるか未確認ではあるが、本人作であるならばごく初期に描かれた人物画であったことだろう。

また、立像の膝部分の絵具が剥落し、その上にはパステルのような色材で加筆もされている。これらの加筆は作家によるものである可能性が高い。それはパステルのような油彩に比して異質な色材をごく少量用いた技法が、田中の他の作例でも見ることができるのだ。その部分の修復処置では作家の追加描写として捉え、充填や補彩はせず、そのままの状態に留めている。また、傷んで取り除かれたと考えられる下辺の麻布が継ぎ足されており、欠損した箇所には、白色の油絵具によるパテ埋めのような処置が施され削り取られた足が描き加えられている。その足の彩色は、周囲の原画と比して色合いが合わず、若干不自然な印象を受ける。現状の観察からは、すでに壊れた人物画に制作をおこない、長年にわたって度々手を加え、また修復もおこなったという痕跡が確認できる。「三人の構図」は作家の造形への思いと、同時に「さざれ石」と共に亡くした友の姿を映しながら向かい合った、まさに戦時下の戦争画であった。そのような作者の思いは戦争中だけでなく、戦後から晩年にまで及んだものであろうと考察するものである。

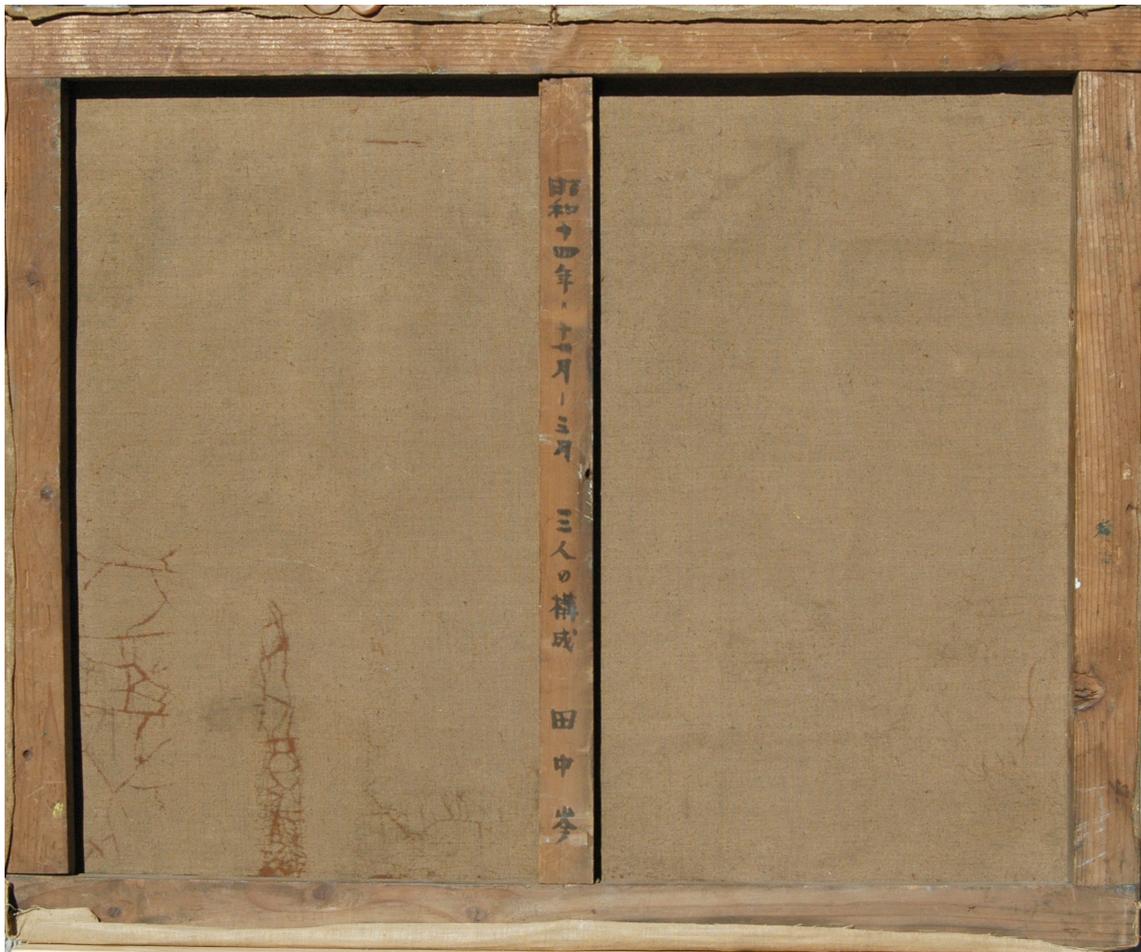
今回の研究では、ご遺族である田中玄さま、田中良さまに多大なご協力を賜りましたこと、東京芸術大学大学院保存修復油画研究室にて快く撮影にご協力いただきましたこと、ここにお礼申し上げます。



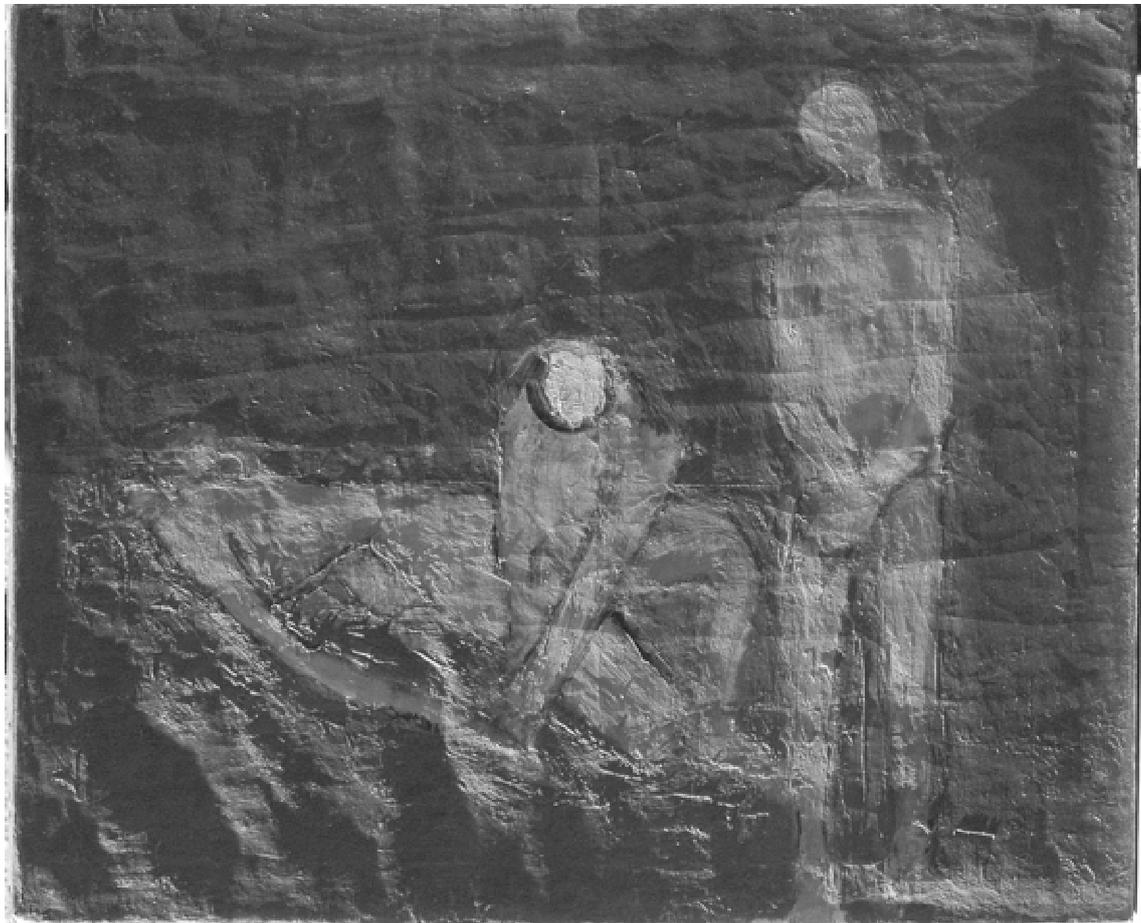
昭和 14 年 1939 年 田中 岑「三人の構図」 修復前／全図



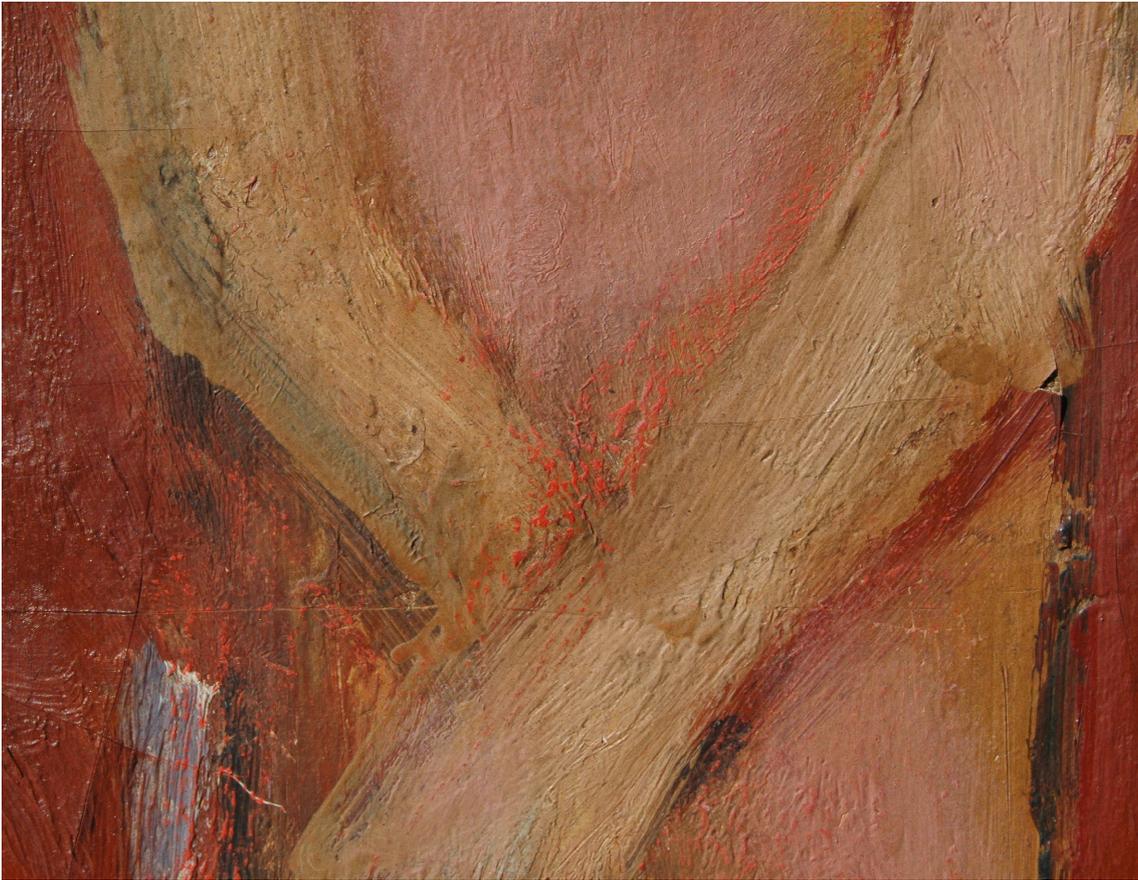
X 線写真／50KV 4.0mA 10sec (撮影／東京藝術大学)



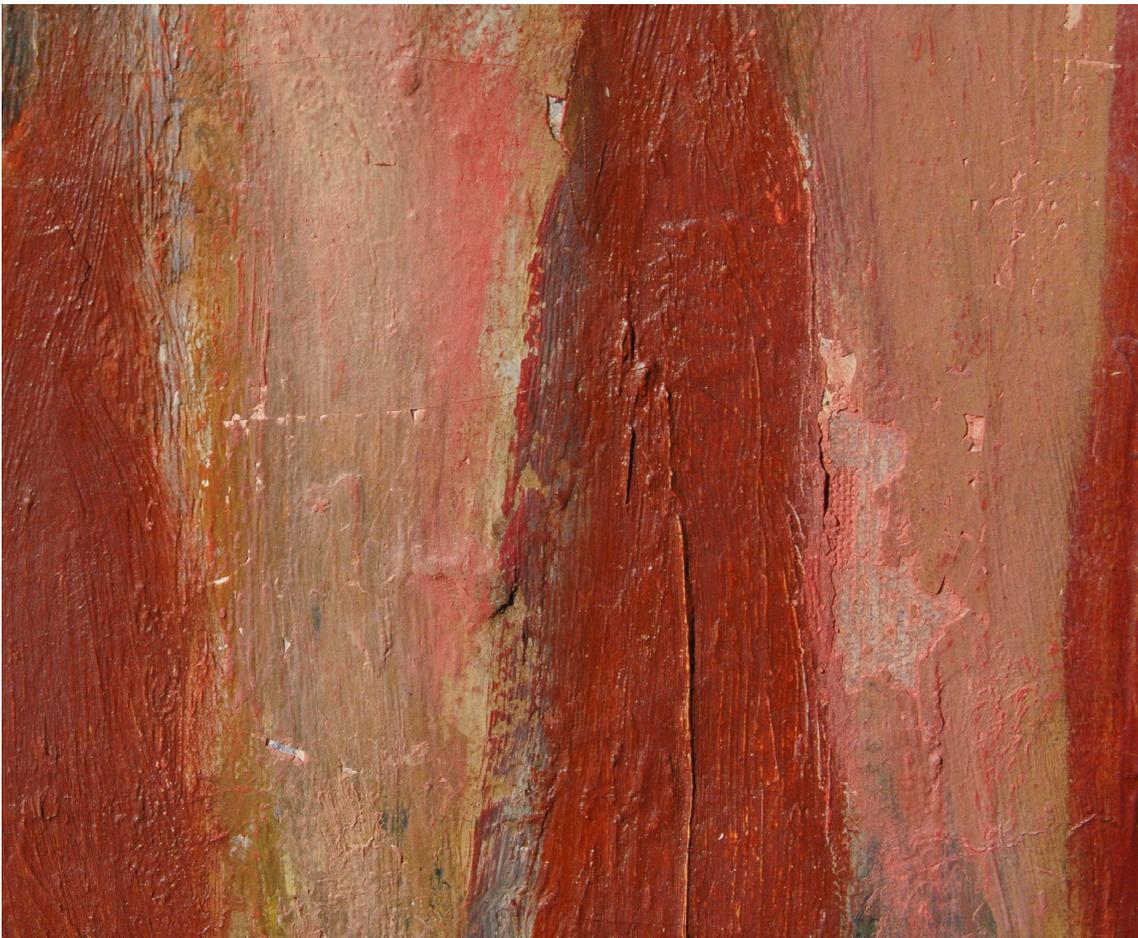
修復前／キャンバス裏面



修復前／側光線写真



パステルによる加筆



加筆は剥落の上にもされている



白色の絵具で充填され加筆



ワックスにより継ぎ足されたキャンバス



《さざれ石》2003年 油彩、パステル、カンヴァス 個人蔵



「三人の構図」 修復後／全図

- 参考文献：株式会社求龍堂「いろいろそうそうー田中岑展」図録，編纂；喜安嶺（川崎市市民ミュージアム），2014 東京 「一銭五厘の青春」『春陽帖』48号春陽会 1971年（※喜安 嶺氏は本年4月より、目黒区美術館に所属する）



Tokyo Conservation